台大日本語文研究第 23 期
2012 年 6 月，頁 25-48
2012-04-18 收稿，2012-06-15 通過刊登

那波魯堂與關西詩壇
——從其儒學與詩學的關連談起——

朱秋而*

摘要

日本江戶的漢詩開始脫離古文辭學派的影響，正式展開新的詩風要從江戶的折衷派儒者井上金峨（1732-1784）的弟子山本北山（1752-1812）的《作詩志彀》問世，這也開啓了批判僞唐詩以及宋詩大受歡迎的風潮，學界先進的論述頗多，無庸贅述。

其中有關京坂詩壇的詩風轉變，一般認爲是從詩僧六如上人慈周（1734-1801）開始積極攝取南宋詩開始，例如出版了《葛原詩話》一書就是最佳的佐證。確實六如給葛子琴、菅茶山等年輕詩人們在作詩與詩論上很大的啓發與影響。不過，能擊退尊崇盛唐詩，轉而普遍接受宋詩的基礎，應該與儒學史流變的價值轉換息息相關。從折衷派儒學到清新詩風的變化雖然偶爾被提及，卻沒有深入的探討與研究。

本論文擬從那波魯堂著述《學問源流》和《韓人筆談錄》等第一手文獻分析探討，包括其弟奧田元繼以及門徒西山拙齋（1735-1798）、畠中觀齋（1752-1801）、菅茶山（1748-1827）等人的儒學與詩學的關連性，試圖進一步釐清熱愛陸游詩的聖護院侍讀那波魯堂對江戶後期詩壇的貢獻與重要性。

關鍵詞：那波魯堂、關西詩壇、儒學、宋詩、菅茶山

* 台灣大學日本語文學系副教授

The Relationship between Nabarodo and Kansai Poem Society: On the Connection between Confucian School and Poetry

Ju, Chiou-er*

Abstract

Sakusi Sikoku (《作詩志彀》), a collection of Han Poetry in Edo era, which was written by Kitayama Hokuzan (1752-1812) as a pupil of Inoue Kinga (1732-1784) belonging to Compromise school, started to get rid of the influence of the classical school, and formally to unfold a new style, opening a trend in criticizing fake Tang poetry and Song poetry.

As for the transformation in Kyoto and Osaka poem society, the public think that it was started from 詩僧六如上人慈周 (1734-1801) who began to actively assimilate the poetry in Southern Song Dynasty. The best proof is the publication of Katsugensiwa (《葛原詩話》). Definitely, the young generation of poets such as Katsusikin, Kantyazan, and so on, were influenced and inspired by 六如 on creating poems and poetry criticism. However, being able to defeat revered Tang poetry and turn to accept Song poetry should be related to the transformation of values of the history of Confucianism. The change from Compromise school to the pure and fresh style was mentioned now and then, but not investigated and studied deeply.

This thesis plans to analyze and make a thorough inquiry from the first-hand documents including Gakumonhgenryu (《學問源流》), Kanzinhitsudanroku (《韓人筆談錄》) written by Nabarodo, about the

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

connection between Confucianism and poetry of his brother Okuda Mototsugu's and his pupils Nisiyama Sessai's, (1735-1798), Hatakeyama Kansai's (1752-1801), Kantyazan's (1748-1827) works. This thesis can also clarify the contribution and importance of Nabarodo to the late Edo era, who was an attendant and loved Lu You's poetry enthusiastically.

Keywords: Nabarodo, Kansai poet society, Confucianism, Song Poetry, Kan Tyazan

那波魯堂と関西詩壇
—その儒学と詩学の接点を考える—

朱秋而*

要旨

近世漢詩が古文辞学の影響から脱し、新しい詩風を打ち出したのは、周知の通り、江戸で『作詩志彀』を著し、偽唐詩を糾弾した折衷学者井上金峨（1732-1784）の弟子の山本北山（1752-1812）である。北山は宋詩風流行の機運を作った人である。

一方、京坂詩壇における詩風転換は、詩僧六如上人慈周（1734-1801）が積極的に南宋詩を摂取し、『葛原詩話』まで刊行するなどによると一般的に言われている。確かに六如は実作と詩論において葛子琴や菅茶山など後輩詩人たちに多大な影響を与えた。しかし、盛唐詩を退け、宋詩が普遍的に受容される土台を築き上げたのは、むしろ儒学の流れの価値転換にあるといってよい。折衷派儒学から清新詩風への転換について今まで若干触れられたが、管見の限りあまり本格的に検討されていないように思う。

小論は聖護院門跡の侍読をし、京都聖護院に塾を開き、陸游（1125-1210）詩をこよなく愛した朱子学者那波魯堂の『学問源流』や「韓人筆談録」を中心に検討し、その弟奥田元継や弟子たち西山拙斎（1735-1798）、畠中観斎（1752-1801）、菅茶山（1748-1827）も含めてその一門における儒学と詩学の接点を探り、関西詩壇においての那波魯堂の役割と重要性を明らかにしたいものである。

キーワード：那波魯堂、関西詩壇、儒学、宋詩、菅茶山

* 台湾大学日本語文学科副教授

那波魯堂と関西詩壇
—その儒学と詩学の接点を考える—

朱秋而

一、はじめに

近世漢詩が古文辞学の影響から脱し、新しい詩風を打ち出したのは、周知の通り、天明三（1783）年に江戸で『作詩志彀』を著し、偽唐詩を厳しく批判し、宋詩風の流行の機運を作った折衷学者井上金峨（1732-1784）の弟子の山本北山（1752-1812）である[1]。

一方、京坂詩壇の詩風転換は、江戸に先立って詩僧六如上人慈周（1734-1801）が積極的に南宋詩を摂取し、『葛原詩話』まで刊行するなどによると、一般的に言われている。確かに六如は実作と詩論において葛子琴や菅茶山など後の詩人たちに多大な影響を与えた[2]。しかし、盛唐詩を退け、宋詩が普遍的に受容される土台を築き上げたのは、むしろ儒学の流れの価値転換にあるといってよいであろう。折衷派儒学から清新詩風への転換について今まで若干触れられたが、あまり本格的に検討されていないように思う[3]。

小論は聖護院門跡の侍読をし、京都聖護院に塾を開き、陸游（1125-1210）詩をこよなく愛した朱子学者那波魯堂（1727-1789）の『学問源流』や「韓人筆談録」を中心に検討し、その弟奥田元継（1729-1809）や弟子たち西山拙斎（1735-1798）、菅茶山（1748-1827）も含めてそ

---

1 日野龍夫「近世後期漢詩史と山本北山」（『国語国文』34 巻 6 号、1965 年）。ほかに『近世の文学（下）』（「日本文学史５」、有斐閣、1977 年）pp.150-164 等参照。

2 上方詩壇における詩風の先駆として六如、村瀬栲亭、江村北海らは、富士川英郎をはじめ、松下忠などの先学たちによって論じられていた。

3 揖斐高『江戸詩歌論』（汲古書院、1998 年）では、「格調派の模擬剽窃に対する批判は、十八世紀半ばを過ぎる頃になると、蘐園の勢力の比較的弱かった上方詩壇を中心に次第に多く現れるようになる。梁田蛻巖やその直接的な影響をうけた京都の江村北海・清田儋叟兄弟、天台宗の僧侶で初めは格調派の詩人であったが、その非を悟って批判派へと「豹変」（『授業編』巻七）し、写実的な詩風を開拓した六如、また大坂では懐徳堂の中井竹山・履軒兄弟が「王・李の遺粕を啜り、物・服の余唾を拾ふ」（『奠陰集』文巻一「呈蛻巖先生書」）として激しく格調派の擬古主義を批判した。pp. 64-89

の一門における儒学と詩学の接点を探り、関西詩壇においての那波魯堂の役割と重要性を明らかにしたいものである。

二、『学問源流』[4]における儒学と詩文の関係

魯堂の弟大坂の儒者奥田元継（松斎）が書肆の要請に応じて刊行した『学問源流』は、兄が生前門人たちに語った延喜天暦より延享宝暦までの日本の儒学文学の移り変わりを詳しく解説した入門書である[5]。出版されたのは魯堂没後の寛政六年であったが、「上自延喜天暦之古、下至延享宝暦近今、文献隆替、世粧流移推焉」とあるによって、宝暦年間（1751-1764）に語られた言説であろう。一般的に言われていた詩風転換の大きな起爆剤である山本北山の『作詩志彀』の天明三（1783）年より時期は早かった。もともと江村北海や京都の六如らと親交のある魯堂は関西の儒学と詩風のパラタイム転換の論客の一人で、門弟詩人たち西山拙斎や菅茶山たちに多大な影響を与えたことは、本書を詳しく検証すれば事実が浮かんでくる。江戸時代以降の内容を次に掲げ、特に各時代の儒学思想と詩文流行の関係に焦点を絞って分析する。江戸時代の学問については、次のように述べている。

> 藤原惺窩ノ学、正大ナリト雖ドモ、章句文義ノ際、猶未明コト多シ、詩ハ唐宋ノ集ヲ雑ヘ用ヒ、文ハ四家八家ヲ用ユレドモ、時化未至シテ、儘和気和習ヲ免レズ、然レドモ、其学ヲ守テ、次第ニ琢磨セハ、実ニ周程張朱ノ純粋ヲモ得ベクシテ、伝ヘテ弊ナキ学問ナリ、其比詩ニ名高キ人ハ石山丈山、其詩ヲ好ミ、詩ヲ学フ、信ニ苦ミ勤メタリ、亦時運ニ由ニヤ格不高句不融白牡丹ト云題ノ律詩ノ前対ニ、白銀盆裡盛金線、碧玉簪頭捧粉團ト作リ、富士山ノ詩、七言絶句ノ転合ニ、雪如紈素煙如柄、白扇倒懸東海天トツクリ、又一日其門人ニ語テ云、今日城代ニ往

[4] 台湾大学所蔵本による。（京都 二条通風月荘左衛門，大阪 心斎橋通泉本八兵衛、巻末に崇高堂河内屋八兵衛蔵板目録（1丁）を付す。寛政6年奥田元継序）「少年必読日本文庫6」所収（博文館、1894年）参照。

[5] 奥田元継が書いた「学問源流序」による。

訪ヒシニ、此間長崎ヨリ来リタル由ニテ、明人ノ七才子詩集ト云ヲ見セラレシヲ読タルガ、李于鱗ノ句ニ、浮雲万里中原色、落日孤城大海流ト云句アリ、明人ハ此等ノ風ヲスクト見ヘタリト、一口ニ語リタルマデニ、門人ニ再問ヒ返ヘス人ハ元ヨリナク、一言ノ詩話モナシ、是ニテモ其志す所ヲ知ルベシ、丈山如此ナルニテ其ノ頃ノ詩ノ風モ亦推テ知ルベシ。

まず、藤原惺窩の儒学が流行る江戸初期は唐詩や宋詩の区別もなく雑然と取り入れられ、「和気和習」から抜き出していないと、魯堂は見ている。当時を代表する詩人石山丈山を例にとり、「格不高、句不融」と「一言ノ詩話モナシ」と評して、その不足や時代の制限を鋭く指摘している。そして万治寛文頃の学風について、次のように書いている。

惺窩ノ後四五十年ノ間、少小ノ異同ヲ云人有ト雖トモ、大抵程朱ノ学ヲ崇ミ、詩文ノ風モ格別異ナルコトナシ。万治寛文ノ比ニ及ビテ山崎敬義嘉右衛門出テ、…凡読ム所ノ書数種ニ止マリ、歴史子書ノ類ハ、一切ニ読ニ益ナシトテ禁之玩物喪志ノ義ナリトテ、文章ニ力ヲ用ヒズ、止ムコト得ザルニ至テハ、平生所読習ノ書中ノ字ヲ集メ、所謂布穀ノ文ヲ作リ、詩賦ノ類ハ一向作ルコトヲ禁ス、…。是ヲ闇斎派ノ学問ト云。

固く朱子学を信仰する山崎闇斎一門は歴史や子部の書などを全部儒学に役立たないとして読む対象から外されているゆえ、詩賦などの文学価値はまったく認められない事態となった。貞享元禄年間に現れた儒学の新しい動向は次のように捉えている。

闇斎ノ後三四十年、貞享元禄ノ比、京師堀川ノ人、伊藤源助出テ、新義ヲ講ス、却テ自ラ古義ト云其居ル所ヲ古義堂ト云ヒ又仁斎ト号ス其説ノ要領トスル処ヲ挙テ云フニ天地ノ間、万事万物唯増長生スルノミニシテ、腐敗衰替スル事ナシ、…文章ハ闇斎ノ如ク禁スルコトナク、又他ノ書ヲ読ムコトモ禁セサレハ、闇斎ヨリ観之、則啻ニ彼善ノ間ノミナラズ、詩ハ至テ稀ニ作ル、道学ノ気習多シ、中年ノ後古学先生ト号セル

ニ因テ…。其子源蔵長胤、号ヲ東涯ト云、…此外著述掌故多ク、頗ル博覧ナリ、故ニ文章モ亦仁斎ニ勝レリ、経義ヲ論シ、或ハ序文ノ中ニハ、所可見殊ニ多シ。詩ハ力ナク味スクナシ、亦不多見、仁斎ハ磊落ニシテ璞素ナリ、東涯ハ寡言ニシテ謹慎ナリ。…仁斎父子ノ学ハ、明ノ呉廷翰ノ見識ニ本ツキ、却テ呉廷翰ノ学ヲ人ニ不説。

古義堂伊藤仁斎とその子東涯についての魯堂の観察である。とくに詩文について、闇斎と違って儒学の書を読むのは禁じられていないが、しかし父子とも詩作はあまりしないと道学の気習が多いと言及している。寛永頃は陽明学も僅かながら一部講じられている。

寛永ノ比、近江ノ人、中江与右衛門、明ノ王守仁号陽明ノ学ヲ首テ唱フ、其居ル所藤樹アリ、因テ人呼テ藤樹先生ト云…後正徳ノ比ニ至テ、京都ニ三輪善蔵執斎ト云人アリ、…執斎ノ学行ハルト雖ドモ、闇斎東涯ニ比スレバ、寥寥トシテ稀ナリ。

続いては江戸中期の徂徠学を述べる部分である。

元禄ノ比、江戸の人、荻生総右衛門アリ、其姓物部ナレバトテ、物ノ一字ヲ名ニ冠シテ、…訳文筌蹄、訓釈示蒙ノ類相継テ著述セリ蘐園ハ其社号ナリ文章ノ才気天然ニシテ力ヲ用ヒテ精ヲ磨ク明ノ時何太復景明李献吉夢陽ノ二人少シキ不同処アレドモ古文辞ノ文章トテ…其法ナク、并ニ文字ノ新タナルヲ嫌フコトハ同シ是レ明ノ時ニ在テ古文辞ト云タル初ナリ其後嘉靖ヨリ隆慶万暦ノ間李于鱗攀龍出テ、大ヒニ二人ノ所謂ヲ喜ヒ其説ニ駕シ、…王元美世貞、同ク此説ニ従ヒ左提右携シテ羽翼ヲナス。

まず徂徠と明の古文辞の関連性を指摘する。次はその詩作方針について述べる。

近体ノ古詩律絶ハ皆唐人ニ倣ヒ、唐ニテモ中晩ノ体ヲ嫌ヒ盛唐ヲ以テ帰本トシ、模擬剽窃信ニ苦メリ是故ニ宋元ノ詩文ハ厭悪ムコト甚シ、其説ニ謂ハク文必取先秦以上詩不作大暦以下ト是ナリ。徂徠全ク此説ヲ喜ヒ、作述皆是ニ倣ヒ、兼テ世間ノ学者詩文ノ道ニ拙ク、其風格ノ違ヘルノ外、和気和習アリ、顛倒錯置アリ…。

徂徠は盛唐を唯一の規範とする中国古文辞派の主張をそのまま取り入れ、詩文の道がまだ発達していない和習の多い時期に、徂徠の優れた詩文の才能を次のように褒め称えている。

> 徂徠詩文ノ才高ク、其言亦皆謂レナキニ非サルニ依テ、信服スル人稍多シ、又稗官小説官府ノ語ヲ読得る人ナシ因テ是ニ遇テ読誤ルコト多シトテ心ヲ用ヒテ是ヲ倣フ其比岡島権之助冠山ト云ル訳人、長崎ヨリ大坂ニ来リ後江戸ニ行タルニ就テ聞クコト多シ。

明の古文辞派の文章を尊重し、その以前の宋元の詩文を極端に貶めているが、その「俊新奇異」と今までにない目新しさで人々に好まれる。

> 徂徠自謂ク、古書ノ後古文能スルハ明人ナリトテ王李七子ノ徒、其余明人の何李王李ノ風ナル文章ヲ貴賞シ、宋元ノ人ノ詩文ニ至テハ、皆口ヲ極テ毀之世ノ人経学詩文、前来諸儒ノ所及ニ非ストテ慕之皆俊新奇異ナリトセリ。

そして徂徠の弟子と詩文とかかわりに触れる。詩名の一番高かったのは服部南郭である。

> 春台ハ経学ニ力ヲ用ヒ、…徂徠ノ説ト少異アリ宋人ノ学ヲ厭ヒ悪ムコトハ、徂徠モ猶及ハサル程ナリ兼テ詩文ヲ作る、全ク明人ヲ帰依スルニモ非ズ、経儒者ノ風アリ、外ノ諸輩ハ皆詩文而已ナリ、南郭最モ名アリ。

しかし、徂徠がなくなったあと、実態は一変、その追随者たちは盛唐詩の模倣でしかない詩を作りながら、互いに持ち上げてほめるあう。魯堂は明末清初の周亮工の書を紹介し、中国の古文辞派の詩文論が本家中国ではすでに批判を受けていることを力説する。また、明の古文辞派はもっぱら詩文に重きを置く学派で経学の解釈に新しさを見出せない。徂徠はその詩文の主張から逆に経義を解こうとしているが、結局、経学詩文一派になってしまったと分析している。その内容は少し長いが、次に示しておく。

> 徂徠ノ説享保ノ中年以後ハ、信に一世ニ風靡スト云ヘシ、然レドモ京都ニ至テ盛ンニ有りシハ、徂徠没シテ後、元文ノ初年

ヨリ、延享寛延ノ比マテ、十二三年ノ間ヲ甚シトス、…古語ヲ綴集シテ文ヲ作リ、詩ハ盛唐ヲ学ブヘシ、是真ノ盛唐ナリトテ、摸擬剽窃シテ詩ヲ作レドモ、唯其朋友同好ノ諸輩、従テ互ニ表賞スルノミニシテ、天下ニ行ハルルト云ニハ至ラス、継テ文ハ帰有光、唐順之、芥千子ノ諸人ニ破レ詩ハ袁中郎、徐文長、陶望齢、譚元春、鍾伯敬ノ諸人ニ破レテ行ハレス、七子ノ流ノ詩文宜シカラスト云コト、周亮工[6]書影ニモ極メテ是ヲ論セリ、当時明人詩文ニ於テハ、七子ノ流ノ詩文ニモ非ス、唐宋元ニモ非スシテ、明一代ノ風アリ、是ハ何レノ時世トテモ推移テ自然ニシテ然リ、七子ノ為ル所ハ唯七子体ト名ツケ、格別ノ詩文トス、清人ハ是ヲ七子ノ偽体ト云ヘリ、経義ニ至テハ、元明以来清ニ及ヒテ、皆程朱ノ説ヲ用ユ、是ニ負ク者ハ、異学左道ナリトテ制禁シ、令甲ニ著ハシテ天下ニ達ス、故ニ七子ノ輩詩文ニハ自見ヲ論スレドモ、経義ハ皆程朱ノ説ニ随フ、七子ノ輩、経義ニ於テハ、元ヨリ其力ヲ用ユルコト不深シテ、其学ニ於テハ亦疎浅ナリト云ベシ。曾テ李九我ノ選ミタル四書纂註ヲ読ムニ、朱註ノ四書ノ上頭ニ、所所諸儒ノ論ヲ挙タル中ニ、唯一処李攀龍ノ説アリ、朱子ノ旨ヲ纏繞シテ論スルマテナリ、王世貞前後四稿ヲ読ムニ、其幾万言ニシテ、経義ニ関渉セルハ、劄記トテ唯僅ニ紙数二三葉アリ、…。此外ハ臆見ニシテ、先輩ノ格言ニ比スヘクモ非ズ、是等ニテ所謂七才子ハ唯詩文ノコトニ専ラニシテ、経義ノ談ニハ深ク及ハサリシコトヲ知るヘシ、徂徠ハ七子ノ文章ノ論意ヨリ、転用シテ古文辞ヲ解シテ、経ヲ以テ経ヲ解スト謂テ、古今ノ註意ニ深く拘ハラス遂ニ経学詩文一派ノ議論ヲナセリ、然トモ其述フル所ヲ見ルニ、皆先賢注家ノ範囲ヲノカレス、其説ノ行ハルルコトモ、中華ニテ七子ノ詩文行ハルルハ、是レニ比スレハ、杳カニ過タリ。

徂徠学の流行によって次のように、記述する。

[6] 周亮工（1612-1672）。清の人。号は櫟園、明の崇禎の進士。古文詞をよくし、著に賴古堂文選、賴古堂詩鈔、字触書影がある。（『中国学芸大事典』参照）

延享ノ初年、京都ニテ講師ノ教ユルハ、滄溟尺牘トテ、…又徂徠ノ弁道弁名ヲヨミ古文真宝、三体詩、聯珠詩格、瀛奎律髄、白氏文集ノ類ハ、栗シテ是ヲ嫌ヒ、四河入海、帳中香ナトハ、名ヲ識ル人モナシ。

平安から中世を経て江戸前期まで模範になっている中国詩文集や抄物類は世に廃れた現象が起きている。

一言ニテモ徂徠其非ナルコトヲ云タルハ見ル人モナク、爛堆古紙ニ同シトス、徂徠ノ草紙可成談トイヘルニ、〜其時世ノ学習、是ヲ以テ推テ知ルヘシ、然レトモ漢魏以上ノ古書、日を逐テ板行シ、詩文ノ章句、和気和習ヲ避クヘキニ心ヲ用ヒ、詩文ノ法一変シテ俗気少ナク、和訓ニ迷ハス、目ト心ト相謀ルト云コトヲ、挙世ノ学者ノ知リタルハ、徂徠ノ功誣ユヘカラス、…。宝暦幼年ノ比ヨリ稍稍ニ徂徠ノ学ヲ疑フ人多ク、専ラ学フ人少ナク、詩文モ亦必漢以上盛唐ヲロニセス、亦闇斎ニモ非ス、東涯ニモ非ス、陸王ノ派ヲ習フハ尚稀ナリ、程朱ノ学ヲ習フカト見ルニ、必シモ信シテ習フニモ非ス。

時代が宝暦になると、徂徠学に疑問をいだく人も出てきて、詩文についても盛唐尊重が和らげたが、儒学はどの学派でもない混沌状態に陥る。魯堂はこの時期の陽明学を取り上げて批判する。次のようなものである。

宋ノ陸子静心学ノ説ヲ発し、初ニ謂フ良知良能四端等ハ、存養ノ力ヲカルニ及ハスト、一時是ニ従ヒ習フ者間有之、…。読書学問シテ、可否ヲ知テ存養シ、工夫思慮シテ、是非ヲ分ツテ、勤勉スルコト、道ニ志スノ功用、是を先トスヘシ、陸子静ノ非ナル処ハ、委シク朱子語類ニアリ、朱子文集ノ書牘ヲ考ヘテモ、大抵ハ知ルヘシ、明ノ陳建ノ学蔀通弁ニモ、朱陸ノ是非ヲ判断スルコト明白ナリ、…陽明ノ説ヲ以テ、学問工夫ノ警策トセハ、其功亦少ナカラス、其弊ヲ云ヘハ読書学問ヲ廃シ、詩文ノ沙汰モナク、孤単空疎ニ至ルヘシ、不知ハアルヘカラス。

その欠点は読書しなくなり、詩文も詠めなくなるところにある。

続いては闇斎の窮屈と見識の限界について語る。

闇斎ノ教、其説多シト雖モ、…用アル処遂ニ用ヲ成サルニ至ル、啻朱子ノ書ニ限ラス、歴史詩文集、子書ノ類多ク読ニ非サレハ、朱子ノ書ヲ解スルナラス、譬ハ人ノ道ヲ行クニ、足ニテ蹈ム処ハ、左右二三尺ニ過ズ、其外ハ皆無用ノ地ナリ、然レハトテ、千尋ノ急流ニ其幅二三尺ノ長橋ヲ掛タルヲ渡リ行クニ、平地ヲ行ク如ク坦坦然タルコト能ハス、手震ヒ足揮ヒ、一歩一歩ヲ顧ミ危フム心甚シ、無用ノ用アルコト如此、闇斎無用ノ用タルヲ知ラスト謂ヘシ、闇斎ノ如クナラハ、学問の道ハ、唯勧善懲悪ノ四字ニテ済むヘシ。古人ノ語ニ、詩書埋首ト云ヒ、尋行数墨ト云ヒタルハ、或ハ自身ノ学問、歳ヲ経テ要ヲ不知シテ得ルコトナキヲ謙遜シテ是ヲ歎キ、或ハ学者ノ泛然トシテ要ヲ得ザルヲ誡シメ、皆為ニスル所アツテ然リ。

そして魯堂は孔子の教えを説き、朱子の並ならず才徳の抜きん出ていることを述べてその学の正当性を主張する。

聖人仰観俯察シテ、人ノ天地ノ正ヲ受ケテ其性善ナルヲ知リ、復其気質ノ濁ニ引レ、…孔子ノ時弟子三千人、六芸ニ通セル七十二人トアリ、ソノ教ユル所、化工ノ妙ニ異ナラスト雖トモ、学フ人ノ気質ニ不同アリテ、本体ノ性ニ復ルコト、深浅遅速アリ、顔淵閔子騫徳行深ク、子夏詩ニ熟シ、子貢礼ニ熟スルノ類ヲ以テ、其他ヲ推シ知ルヘシ。朱子ニ至テ天然ノ才徳衆ニ秀テ、学ヲ好ムコト亦厚ク、李氏ノ学ヲ受クト雖トモ、即周程ノ緒ヲ繹思シテ、昇テ孔曾思孟ノ真ニ接スルコトヲ得テ、天下万世ノ宗師ト成テ其道統ノ伝ヲ継ケリ、孔子以来一人ト称スルコト、宜当ノ論ト謂ヘシ。

さらに程朱の儒学説の精細真実を縷説し、中国では他の学説を凌いで尊重されたことによって、日本、朝鮮、琉球もこれに準じて知る必要があろうと強調する。内容を次に抄出しておこう。

宋ヨリ前ノ学問、其流多シト雖モ、畢竟精細サルコト、遂ニ程朱ニ及ハス、程朱ノ論極メテ精細真実ニシテ人心ノ所同然ヲ

得タル故ニ、後ノ人是ヲ奉シテ貴ヒ用ユルコト、世ヲ易フレトモ不改他ノ新奇ノ説、仮令姑ク行ハルル如クナレトモ、年ヲ経テ廃替シテ用ユル人ナシ、中華已ニ如此ナレハ、其他日本朝鮮琉球ノ諸国皆準シテ知るへシ。

また蘐園学派の儒学が一世風靡した近世中期の詩文の特徴については、魯堂は次のように、

正徳享保ノ比ヨリ、延享宝暦ノ比マテ、明人ノ古文ト云ヲ学フト謂へシ、其間巧拙強弱アリト雖モ、大率和気和習ニ引レ、甚シクシテハ顛倒錯置有テ、牆渋難読ニ至ル、畢竟強テ論スルニ足ラス、因テ何レノ体ノ文ヲ学フ、或ハ習フトハ謂フへシ、何レノ体ノ文ヲ書トハ謂ヒ難シ。

と述べ、「和気和習」に引かれて難読きわまると厳しく批判している。さらに中国の詩体の成立変遷と詩風の流変についてくわしく分析を加える。次に掲げておこう。

詩ハ三百篇ヲ本トシ、変シテ漢魏、…三百ノ後隋ニ至ルマテ変シタルハ、其人有テ意ヲ変シタルニ非ス、時代ニ従テ、自然ニ変シ、早晩トナク如此ナルナリ、唐ノ人漢魏ノ体ニ擬シテ作ル詩ハ、其定メテル法ヲ用ヒス、漢魏ニ準ラへ作リ出ス、晩唐ニ至リ、其間意興句格ハ種々アリト雖トモ、律絶古詩ノ制法ハ改ムルト云コトナシ、是ハ唐一代ノミナラス、五代以後今ニ至テ然リ、其後来詩人ノ作意一ニナラス、万端千緒ト雖トモ、詩ノ搆へハ唐人窩窟ヲ遁ルルコトナシ、然シテ其同シカラサルハ、唐人モ其人人ニシテ不同ナルニ異ナラス、且ツソノ宋元明清、各其世ノ風ハ文章論ニ異ナラス、避クへキニ非ス、亦人力ニテ中中避ルルニ非ズ、若是ヲ避ケントセハ、上ニ述へタル如ク、人十陪根機ナラスシテハ実ニ難キコトナリ、大抵ハ宋人ノ詩ハ晩唐ニ近ク、元ノ詩ハ宋ニ近ク、末ニ至テ天然ニ明詩ノ口気アリ、明人ノ詩モ亦一同ナラス、然レトモ明ノ詩ニ其明人ノ風アリ、亦宋元ノ人如何程ニ異ナル詩ニテモ宋元ノ風アルト同シキトナリ、其風ト云ハ自ラ会得スルコト可ナリ、他人ヲ仰キ難シ。

中国の各時代の詩風の移り変わりについての魯堂の観察はいくら明の人が盛唐詩を真似しても、必ずその時代の色を帯びてくるということになる。結果としては、詩風とは「個人の体得」によるもので、他人に規範を求めるものではないものである。そこからさらに進んで従来、詩文制作の規範を中国に仰ぎ続けてきた朝鮮、琉球と日本について、それぞれの詩風や特徴を持つことは自然な成り行きであると、斬新な詩作の主張を打ち立てていることがわかる。

> 所謂七子之詩、皆自ラ盛唐ヲ学ビ、晩唐ヲ嫌フト云フトイヘトモ、遂ニ明ノ明タル所ハ免レ難シ、袁中郎徐文長譚元春鍾伯敬陶望ノ諸人、又是ニ限ラス、幾千人ノ詩ノ風ハ、違ヘトモ、時代ヲ免ルルコトナラス、是唐以後唐詩ノ得ヘカラサル所以ナリ、因テ如何様ニ学ヒテモ、朝鮮ハ朝鮮ノ風、琉球日本ハ琉球日本ノ風有テ其口気免レ難シ、清朝ノ人ノ詩亦唐ニ倣フテ其清人タル句調アリ、不知ハアルヘカラス、

最後に、学問にしろ詩文にしろ誠実誠心の不可欠を次のように強調する。

> 大抵綱領ヲ論スルニ、経学道理ノ要ハ言ニ不及、文章モ詩モ、信実誠ノ心ナクテハ成就スヘカラス、僅ニ微塵ハカリニテモ名ヲ求メ、又ハ利ヲ求ムル気有テハ、決シテ拙ナクシテ見ルニ足ラス、執筆臨紙ノ間、胸中好文字ヲ作テ、人ニ巧者ニ誉ラレタキ気象アル是已ニ悪消息ト思フヘシ、然レバトテ吾已ニ誠ニ志ス、他ノ受用ヲ仮ルニ不及ト云コト有ヘカラス、是経学ノミナラス、格物致知ノ用アルヘシ、学者ノ所当深思也、其宜シク務メテ急ニスヘシ。

実情実景を重視するという、これは今までの徂徠学派とは正反対な詩作態度を魯堂の持論として高く評価してよいと思う。

次の章は魯堂が一七六四年の朝鮮通信使に随行し、朝鮮の撰述官たちと筆談した資料を元に魯堂の詩文についての考え方を探ってみる。

三、魯堂の『韓人筆談録』[7]に見る詩文観

近年、江戸時代に十二回にわたる朝鮮通信使資料が韓国と日本で注目を集め、「朝鮮群書大系本・海行摠載」や「大系・朝鮮通信使」（明石書店刊）などの文献資料集が出版され、日韓交流史、思想史研究など幅広く利用されている。ちょうど学術転換期に当たっていた第十一回宝暦十四（1764）年いわゆる甲申通信使について、夫馬進氏は日中韓にまたがる学術思想史を交差比較し、三国の異同を鋭く指摘している[8]。

実は一七六四年通信使が日本にやってくる当時３６歳の魯堂は、現在京都の熊野神社あたりで私塾を開いて儒学を講じていたが、それを聞きつけ、もちろん接待係ではなく、一民間人として幕府の許しを得て、護衛と言う名目で通信使の大坂―江戸の往復を随行した。朝鮮語も先遣隊に学んだが、主に漢文を使って通信使の書記官成大中（龍淵）・副使書記元重挙（玄川）・製述官南玉（秋月）らと筆談し、当時の筆談内容を記録した「韓人筆談録」があり、また漢詩文の応酬を集める唱和集『東游篇』も残っている[9]。これらはあわせて魯堂の学問を理解する第一級の資料である。

筆談の内容によってそれぞれ項目を立てて記録している。例えば、魯堂が製述官南玉と初対面の時の応答は「名刺」と言って当時のやり取りは次のようなものである。

（一）名刺

厭稠人未敢污高明。僕姓那波、名師曾、號魯堂、從公等一行赴東武。伏乞認鄙貌（魯堂）。君以何任從吾輩往東武（秋月）。在膽長老一中行（魯堂）。

---

7 猪口繁太郎『四國正學魯堂先生』(虚順堂、19166)収録の内容による、pp.14-31。

8 「朝鮮通信使による日本古学の認識―朝鮮燕行使による清朝漢学の把握を視野に入れて―」(『思想』岩波書店、2006年1月)、「一七六四年朝鮮通信使と日本の徂徠学」(『史林』第89巻第5号、京都大学史学研究会、2006年7月)、「一七六五年洪大容の燕行と一七六四年朝鮮通信使―両者が体験した中国・日本の「情」を中心に一」(『東洋史研究』第六十七巻第三号、京都大学、2008年9月）などがある。

9 京都大学付属図書館所蔵本参照。

通信使の一員である南玉に対して魯堂が自己紹介をし、一行に随行する役目は何であるかが聞かれた。以下、詩学と儒学にかかわりのある議論を煩を厭わず列挙し、朝鮮通信使の観点と比較しながら魯堂の学問と詩論の立場を解き明かしてみたいと思う。

（二）唱和

經述史于固當先務處、僕好歌詩。然唱和往復多多疊疊、未暇細尋推敲、則落鄙俚亦可厭也。是故不必闊險貪多、所贈小律、今日在館中、想像賢等其遊遠來之興、偶爾賦之、東武往返千里而遠、為日亦久、觸意和之、或為心交之地如何？嚮一讀皇華集、甚覺疊和深害詩道、所以併及也（魯堂）。

この項目に儒者である魯堂は四書五経の学問はもとより重視すべきであるといいながらも、自分は詩歌を好むと明言している。詩人のスタンスを取っているとも解せよう。そのあとすぐ明英宗の正統十四（1449）年に使臣として朝鮮に派遣された倪謙らと李朝官員の応酬の詩作はのち『庚辰皇華集』に収録され、刊行された。魯堂はそれも読書の守備範囲内にあり、中韓の外交官が詠んだ詩の道を著しく傷つけている唱和詩の欠点は「疊和」、つまり重ねて唱和することである。と、もともと朝鮮と日本の憧れの的である中国詩文でも外交の場面に応じて繰り返される応酬詩のマンネリズムを見抜いていた。

詩の「格」、つまり詩の格式・体裁形式・風格を次のように、

（三）詩格

中華詩格、唐後屢變、明人浮靡固亦可厭。弊邦人往往有學之者、而中華復宗香山髯蘇、間取義山西崑用之、余頗愛之。詩唯宜煅字煉句而後人格而已。其以眼前口頭論之、蓋回護飾陋也（魯堂）。詩論正矣。然徒效西崑、組織纖濃、反失大雅之本意、不如旦熟看三唐草堂旁取香山劒南、是近體之指南（秋月）。固如高諭、而劒南則僕所最愛、他日途中有得意高作則示之（魯堂）。

と魯堂と秋月が論じていた。中国本土の詩格変遷、とりわけ明の詩風は日本では（徂徠一門に）取り入れられていたが、魯堂はそれを

ただうわべごとのあでやかさと嫌い、退けた。自分がすこぶる愛好しているのは白居易・蘇東坡に依拠し、場合によって李商隠風の典拠・妍麗・巧緻を重んずる西崑体を用いるものを愛好する。いかに字句を鍛え洗練させるかがメーンで、人格は後回していいという、詩作が儒家の倫理観や道徳観から独立していることは明らかである。

一方、通信使の南玉は大体、魯堂の意見に賛成いていたが、西崑の繊弱さは詩の本意「大雅」にそむいているので、熟読の対象として三唐杜甫を中心に、傍ら白楽天と陸游も取り入れると主張する。通信使のこの発言を聞いて魯堂は「劒南則ち僕最も愛する所」と答え、強く賛同の意を表した。南玉の詩文観は盛唐詩とくに杜甫が最も重要視され、白居易と陸放翁は学習対象とされるが、しかしあたかも付随的な存在である。しかし、魯堂が「劒南則僕所最愛」と、『劒南詩稿』を一番高い位置に置いている点は、二人の詩作態度の違いを克明に物語っていると見ても間違いないだろう。

そして次項目で魯堂は引き続き、「明儒」の学風を厳しく批判している。

（四）明儒

> 明儒王李輩、皆厭濂洛之正宗。…本邦近來一二學者效之。貴國人文章詩賦、大率未染此習、僕甚愛之。如弇州四部稿、嘗細讀之、風雲月露、詩文可驚、三才評騭、學識可敬、山水書畫、高雅可稱。然至他聖賢述作之説、寥寥晨星未觀其正大之著論也、可惜可嘆（魯堂）。

明の古文辞学の中心人物である王世貞と李攀龍を指していることは言うまでもない。魯堂は朝鮮の詩人たちはこの学派に影響されていないことが幸いで、自分は彼らの詩文を愛すると述べている。王世貞の詩文集を読むと、詩文は驚くほどよくできており、学識も尊敬されるほど豊かで、それに山水書画も高雅と称すべきであると高く評価している。儒学著作の寥々たることがひどく惜しまれている。明儒における経学の成果をほとんど認めていない姿勢をとっていることが一目瞭然である。さらに明詩に関しては次のように述べている。

（五）明人詩

明人詩如大聲而語、此成學士之語。雨芳洲謂、其咀嚼則無味之謂而已、如何（魯堂）？ 成學士何歲來此（龍淵）。辛卯歲（魯堂）。成嘯軒學士僕之從祖也、一生用工於詩、其定論僕家世守之矣（龍淵）。

魯堂が紹介した明詩を「如大聲而語」と評した朝鮮詩人は、実は成嘯軒ではなく、一七一一年通信使の製述官である李東郭で、ことはすでに張伯偉氏に指摘されたとおりである[10]。嘯軒の子孫と自称する龍淵はまったく誤認に気づかなかったようで、ただ先祖の詩説を代々守っていると律儀な応答をしたのみである。これに比べて、魯堂のほうはさらに中国語と朝鮮語に精通している儒者雨森芳洲（1668-1755）が「咀嚼則無味」と、明詩は無味乾燥の代名詞だと貶めている評論を龍淵に紹介した。

次は漢詩人が詩を作るに際して、特に日本と朝鮮の詩人にとって欠かせない「韻書」についての対話内容である。

（六）韻冊

和本韻冊如掌面大者、字本甚精、且宜於馬上看、僕有友人標格如神仙中人、向來同入金剛山哦詩之際、為語此冊欲得一件、君幸為僕覓來一二件納於歸橐、則儘一奇事、必須圖之、價則固已其待耳（龍淵）。極力致之（魯堂）。

通信使書記官の龍淵は日本で出版された「韻冊」は手のひらの大きさで字の大きさや印刷ともに精緻で馬に乗っている移動中に使うのに適していると、友人もほしいと一、二セット探してくれないかと、「儘一奇事」という大げさな理由を付けで魯堂に頼み込んだ記述である。直接詩風や詩論に触れるものではないが、江戸時代の実用韻書の出版状況とその特徴を朝鮮通信使の目を通じて垣間見ることができた。江戸中期以降の日本漢詩の普及と盛況を支えている出版技術の向上と人的移動が頻繁になった当時、便利な小型韻書が考案された。中国や朝鮮にはなく、日本人独特な器用さと美感覚、それに

[10] 張伯偉「漢文學史上的 1764 年」『文學遺產』所収 pp.114-131、2008 年。

実用重視が生み出したものといえよう。

次の項目は朝鮮詩人の作品についての評価である。

（七）李匡呂詩

滿戸影交修竹枝 夜深西閣月西移 此身已與香全化 嗅逼梅花寂無知。

此吾東文士李匡呂之詩、魯堂看得果如何（龍淵）？起承清新、轉合巧緻。其他再會細論之（魯堂)。

龍淵は本国文人「李匡呂」の七言絶句を紹介し、「いかが」と魯堂に意見を求めた。魯堂は一・二句は清新、三・四句は巧緻と誉めて、深い議論はまた次の機会を待つと述べている。この対話で「清新」と「巧緻」は魯堂の詩論の重要なキーワードであることとわかり、いわゆる清新詩論の支持者、もしくは提唱者といったほうがより事実に近いと思う。

今度は魯堂と龍淵二人が君子の交わりについてかわした会話である。

（八）紫衣客舎

僕在此坐、心卻安穩勝似在紫衣客舍中、以其解意君子深交相許也。如客舍中談人談馬談金談錢俗輩最多、故來在此、真是天上之歡樂（魯堂)。紫衣僧坐又添一話為是朝鮮參、好不好來不來（龍淵)。才語（魯堂)。僕輩相對亦苦被惡緣詩相迫、不能談天談人談山談水談道談詩、與僧席不過五十步百步間愧甚愧甚（龍淵)。話奇且清（魯堂)。

龍淵と議論する話題はいつも人、馬、金にまつわる凡俗の徒と異なり、まさに自分の真意をよく汲み取り、深い交わりを許してくれる君子であり、一緒にいると高僧の客舎にいるより心が穏やかであると魯堂は、相手を褒め称える。

龍淵は坊さんでも朝鮮人あるかないかをひどくせがむものもいると一つ経験談を付け加える。通信使の自分は常に悪縁詩に迫られるので、僧侶たちの朝鮮人参談とは五十歩百歩、あまり笑えない。本当は「談天・談人・談山・談水・談道・談詩」をしたいと、龍洲は

詩人君子の本音を吐露し、魯堂も「奇且清」な話だとその新奇性に驚きながらも賛同できるようなコメントを残した。

魯堂は続けて李朝の詩人楊士彦の作品を見せられ、またも評価を求められた一節である。

（九）楊蓬萊詩

今日吾寫春溪紙上蓬萊思庵漠陰詩、魯堂見之如何？蓬萊者楊士彦也、有仙風道骨、一生遊關東山水筆法尤翩翩有仙氣、嘗聽琴賦三五七言曰、綠綺琴、伯牙心、一鼓復一吟、鍾子是知音、冷冷虛籟起遙岑、江月娟娟江水深（龍淵）。先從春溪側觀之自謂此詩似髯蘇水翁操、何等仙風道骨、不食煙火之語、今得尊示果然、志之所之不可掩也信矣（魯堂）。<u>魯堂詩眼真顯得仙氣</u>（龍淵）。

蘇東坡に似ていて、凡俗を離れた仙人の気質・風格を漂わせている志の明らかな作だと魯堂は、龍淵の見方を踏まえがら答えた。これに対して龍淵も魯堂の詩を見る目を､仙気を帯びていると賞賛した。日韓交流の過程で魯堂は儒者よりも当時の日本を代表する一詩人として取り扱われていることを見逃してはならない。

龍淵はもう一人一六八二年通信使洪滄浪の詩を挙げ、意見を求める。

（十）洪滄浪

曩昔壬戌信行時洪滄浪世泰隨來唱和頗多。日東人以為如何（龍淵）？

刻本今猶傳之、洪公詩名弊邦自高（魯堂）。洪亦少時學唐、其山鷓鴣詞曰、江南江北鷓鴣鳴、風雨驚飛失故棲、一落天涯歸不得、瀋陽城外草萋萋。此詩為中州才女季文蘭而作也、文蘭江南士人妻。明末兵亂為清兵所虜、賣作王平章妻、出瀋陽至榛子店、壁上題山鷓鴣詩。我國詩人聞而悲之、皆和其意紅詩最佳（龍淵）。起得其體（魯堂）。洪別人詩曰：青楓煙雨駐歸舟、落日秋山滿一樓、自是江湖好風景、卻因離別使人愁（龍淵）。　得意境因人轉作失意、此是別離多人自能知之、<u>今入詩來又新奇</u>、成

公屢如此、詩使人轉增感（魯堂）。

日本で行われた唱和詩のできはいかがと聞かれるに対して、日本では詩人としての名声は高いと答えた。続いて明末の戦乱で運命に翻弄された女性を詠んだ山鷓鴣詩に唱和した洪詩について、魯堂は「起得其体」と簡単に返事し、興味をあまり示さなかったようである。しかし、二首目の「別人」詩に詠まれた風景と心境の微妙な関係と変化を、魯堂は「新奇」であると高く評価し、詩は人の感情を深め動かす力を持っていると強調した。

龍淵はさらに梅月と梅竹の詩を列挙し、魯堂が感想を述べる。

（十一）梅月梅竹詩

風雨蕭條拂釣磯、渭川魚鳥可忘機、如何老作鷹揚將、空使夷齊饑采薇、金梅月堂題渭川垂釣詩（龍淵）。題渭川圖者、詩家特多、此詩抑揚分明、且不著畫樣故事、更奇更新、使人不厭（魯堂）。當時叩馬敢言非、大義堂堂日月輝、草木亦沾周雨露、愧君猶食首陽薇、成梅竹軒題灤河夷齊廟詩（龍淵）。一頌此詩夷齊復生、詩之動人一至于此（魯堂）。

梅月の「題渭川圖」詩について、常套的な題でありながら、音韻の起伏「抑揚」がはっきりとして、「畫樣故事」にも陥らず、いっそう新しく奇抜であると賞賛する。やはり、新奇を追求する詩作理想と態度が明白である。

第三項目に挙げた「詩格」を議論したくだりに、南玉が杜甫唐詩を熟読し、「香山劒南」を旁取するという主張を聞き、魯堂はあたかも異国の知音を得た如く「劒南僕所最愛」と答えている。それをお土産として南玉に贈ることまである。

（十二）劒南集

相贈之意、非貨非物、可感可敬。但欲魯堂熟觀老陸以為晩年指南、今以歸我、恐魯堂失一詩燈（秋月）？ 劒南歸□□此得其歸、因以為相思之地、則喜示如何哉？更有示老陸為晩年指南之語、僕猶有劒南詩抄一本、併此行請益蒙化之話、則老來指南最多（魯堂）。

贈られ側の秋月はもともと老後の指南として勧めたつもりであったのに、それを自分のものになったとはややすまない気持ちで「詩燈」つまり詩作のお手本や道しるべを失うじゃないかと聞くに対して、何と魯堂は自分にはなお「劒南詩抄一冊」を所蔵してあり、心配はご不要である。いかに陸游に傾倒していたのかは、南玉ら朝鮮通信使の唐詩重視の詩論態度と比べて魯堂の南宋詩好尚が一層はっきりと見て取れる。最後は著作についての応答である。

（十三）著書

有著書否（雲我）？唯有錄集鄙稿數卷、及詩話若干卷、莊註字解、論語廣旨未刻、曾校定楊升菴左傳已刻（魯堂)。學徂徠乎（雲我）？否（魯堂)。

著書はあるか聞かれた魯堂の答えに、まず「錄集鄙稿數卷，及詩話若干卷」と､作品を集めた未刊の詩稿数巻と詩話が挙げられている。徂徠を学んでいるかと問いに対しても、いや違うときっぱりと否定した。青年魯堂は詩人躍如の一面をよく見せてくれた。

まとめてみると、筆談の中に詩文に言及する段落は十数か所にのぼる。具体的にわかったことは、魯堂は詩文の愛好家、特に南宋陸游の『劒南詩稿』を愛読していることが記され、贈答品として南玉に贈ったことが面白い。個人の著作の中に「詩話数巻」と自ら語っている。残念ながら現存していない。しかし儒者魯堂がいかに詩文を愛したのかをよく物語り、詩賦文章そのものの価値を認め、自由自在に嗜み、儒学と詩風の転換の接点をこの筆談録から十分に垣間見るができたと言えよう[11]。

---

[11] 付け加えておくと、前掲注８の夫馬進氏の引用と記述によると、那波魯堂は朝鮮通信使の日記の中に「才子」や「赤心（の人)」と褒め称えられている。
・元重挙『乘槎録』六月十八日「蕉中（竺常大典）は禅門界の白楽天である。那波孝卿（那波魯堂）は俗事から身をひいた子産である。滝弥八（滝鶴台）は海外の華人である。岡田宜生は日本の唐詩である。わたしは海中において四人を得ただけである。」
・成大中『槎上記』「書二才子事」（乾隆 30 年）
・元重挙六月二十二日「「至若江戸名流徒之揮涙於品川、浪華才士輩の呑声於茶肆、尚令人念之悄悵。若夫師曾（魯堂）之片片赤心、竺常（竺常大典）之の言言理致」。
・南玉『日観記』五月六日：「その心は透明で濁りがない（其心無所染也)」

四、おわりに

以上のように見てきた詩風転換期に、山本北山よりいち早く詩文制作の新しい見解を示した魯堂は確かに門下生に大きな影響を与えた。というのはその弟子に近世後期漢詩の集大成といわれる菅茶山がいる。また同時期に活躍した西山拙斎もそのひとりである。拙斎の詩集に「讀魯堂先生選詩論、慨然有感因賦一詩寄佐長史」という作品がある。魯堂が詩論を選んで学生たちに読ませていたことがわかる。

菅茶山の詩集『黄葉夕陽村舎詩』の跋文に弟子の小寺廉之は次のように、茶山の回想を記している。

> 菅恆先生講説之暇、蒔花聴鳥以為娯、而未嘗見其撚聳肩。因質諸先生、先生曰、吾三十歳前頗用意雕鐫、魯堂先生曰、子思作佳詩不得不求佳境、欲求佳境不得不虚構競奇、是役於詩也。隨境寄興、可以娯、可以遣憂、勿他求。吾服其言、不復刻苦、予回以謂其詩之不多為不為虚構也、其語之平易為不為競奇也。世之以此名、汲々孳々者亦多矣。然人特属意於先生何也、乃知所謂真詩者不在。

魯堂の真実に基づき、虚構せず詩作態度が弟子たちに豊かな詩作成果をもたらしていることは、拙斎と茶山の詩集と詩壇評価からでも十分窺うことができる。魯堂が近世後期の詩風転換における位置づけとその影響の重要性をもっと正しく評価すべきのではないかと思う。今回は魯堂のもう一人の弟子、狂詩壇で異彩を放った畠中観斎（銅脈先生）を取り上げる余裕はなかったが、次の課題にさせていただきたいと思う。

参考文献

『拙古堂日纂』（大阪府立中之島図書館蔵、39 冊）。
『拙古堂雑抄』（国立国会図書館蔵、12 冊）。
西山拙斎『拙斎西山先生詩抄』写本
那波魯堂（安永年間）『魯堂先生学則』、写本
那波魯堂（1894）『学問源流』博文館（「少年必読日本文庫６」所収）
那波魯堂（1916）『韓人筆談録』（猪口繁太郎著『四国正学魯堂先生』虚順堂）
那波魯堂（1936）『先哲叢談後編』巻八（「大日本文庫」儒教篇、春陽堂）
姜在彦訳注、申維翰（1974）『海游録』平凡社
菅茶山（1985）『黄葉夕陽村舎詩』（富士川英郎ほか編「詩集　日本漢詩シリーズ」第九巻、汲古書院）。
辛基秀・仲尾宏編（1994）『大系　朝鮮通信使』第七巻、明石書店
辛基秀（1999）『朝鮮通信使』明石書店
倉地克直（2001）『近世日本人は朝鮮をどうみていたか』角川書店
日野龍夫（2005）『江戸の儒学』（「日野龍夫著作集第一巻」ぺりかん社）
朴賛基（2006）『江戸時代の朝鮮通信使と日本文学』臨川書店
鄭章植（2006）『行使録に見る朝鮮通信使の日本観』明石書店
稲田篤信（2011）「江戸の学芸と明清漢籍―松斎・庭鐘・秋成の場合」（『台大日本語文研究』第 22 期、2011 年 12 月）奥田元継（松斎）の読書ノート